



MHF
ものから
『ルアとユキ』

エピローグ

ポポは村に突如乱入した。

大声で意味のわからない叫び声を発している者や、大泣きしている子どもいる。

大きな街では家畜として飼いならされているポポでさえこの村で見ることはほとんどないというのだから、野生のポポが突然現れたことは村の人々に大きな恐怖を与えた。

村を守るため、家族を守るために武器を持った村の男たちがそのポポの周りに集まり歯をくいしばりながら前かがみになって睨みつけている。

緊迫した空気の中子ども達の泣き声がさらに大きくなり村全体に響き渡った・・・

と同時に男たち全員が呼応するかのように雄叫びをあげながら一斉にポポに飛び掛かっていった。

草食種のモンスターであるポポは普通この村からはるか遠くの雪山に生息し

このような暖かい環境の場所に来ることはない。

群れから離れ一匹だけなぜこんな場所にきたのだろうか？

本来生息する雪山に天敵が現れ追い出された結果辿り着いたのであろうか？

それとも雪山に食糧がなくなり我を忘れて人を襲いにきたのであろうか？

どういった理由かは全く不明であったがそのポポは村に強引に突入し、人々に恐怖を植え付けたのだ。

しかし男たちに囲まれた後は死を悟ったのか驚くほど静かになった。

小鳥がいれば枝と間違えて止まったであろうほど静かに、無抵抗に。

そしてそのまま男たちに一方的に斬られ続け、ゆっくりと足元から滑るように傾いていき土煙りを舞い上げらせながら音を立てて地面に沈んだのだった。

「村長！ポポを討伐しました！」

「どれ？おやまあ！これは大きなポポじゃ。これだけの毛皮があればユキノを温めることができるコートが作れそうじゃ、良かった良かった、本当に良かった」

「村長！妹が、ユキノがなんだかおかしいんです！！」

村の中央に位置する大きなテントにルアは飛び込んだ。

乱れた呼吸と靴を履く時間すら省いていることがルアの焦燥感を強く物語っている。

その腕の中には先週7歳の誕生日を迎えたばかりの妹であるユキノが抱えられていた。

普段はとても活発で笑顔が絶えないユキノであったが、現在はルアの腕の中でぐったりとして氷のように冷たくなっている。

病や人体の知識が皆無に等しいルアにもこの体温がいかに深刻な状態なのかは十二分に伝わっていた。

だからこそ全速力で村長のテントまでやってきたのだ。

「大声を出していったいどうしたんじゃ！」

ルアの叫び声に驚いた村長はすぐさま駆け寄ってきた。普段は艶やかに纏まっている紫色のルアの髪が大きく乱れている。ただならぬ空気を感じながら村長は抱かれているユキノの方に目をやると言葉を失った。

数秒の間があり、口を開き始めた時には顔全体に憂色を浮かべていた。

「これはいかん……ユキノはとんでもない病にかかっている」

「とんでもない…病…??」

村長の不安げな表情が伝染したかのような細かい声でルアは聞き返した。

「以前ここに寄った行商人が言っていた病に症状がそっくりなんじゃ」

「だから何！あまり遠まわしな言い方はしないで！どういう病気なの？」

どうすればユキノは元に戻るの?! ねえ、教えてよ！」

「徐々に全身の体温が奪われていき……」

このままいけば……死んでしまうかもしれん……」

「死」という言葉が耳に入った瞬間ルアの目はゆっくりと閉じられ大粒の涙が頬を伝っていた。

端正な顔は見る影もなく歪んでおり気の所為かテントに入ってきた時よりも体全体が萎んだようであった。

「どうして……どうしてユキノなの……どうして……」

「詳しいことはわからないんじやが、この病はユキノのような幼い子供以外は感染しないと聞いておる。それと治す方法はひとつだけ……」

「あるの!？」

「行商人の言葉を信じるのなら、体のある一定以上の温度で温め続ければ病状は悪化せず人の持つ免疫力で徐々に改善していくと……」

ルアはすぐさま近くにあるベッドにユキノを寝かせて布をかけてやった。

ただしこの村の気候は年中変わらず暖かいため、体に架ける布の厚さは5mmほどしかない。

こんな薄い布を何十枚重ねたところでユキノの病の進行は止められないだろうと頭では分かっていたが、ルアはそうせずにはいられなかった。

「じゃあユキノはずっとベッドの上、布を架けた状態から動けないってこと？」

もう外で遊ぶこともできないの？」

あんなに外で遊ぶことが好きだった子が一日中お家の中にいなきゃならないって知ったらどれくらい悲しむかわかる？それも完治するのは何年先になるかわからないんでしょ？」

そもそもこんな薄い布だけで大丈夫だなんてとてもじゃないけど思えない!!

ユキノが死んじやったらどうするの?! ねえ! 村長! 聞いてるの!？」

「落ち着きなさいルア。わしだってどうにかしてやりたい。しかし方法が……」

もともと細い目をさらに細くして困り果てた顔を作っている村長に対して

「あるわ！私知ってるもの。あそこに見える雪山の頂上にどんな病もたちどころに治してしまうという秘草『百色たんぽぽ』があるって。この村から出たことがないからって馬鹿にしないでよね」

テントの外、村の遥か遠方にある霞がかった山の方向を指差し

ルアは今にも飛び出しそうな勢いで言い放った。

「それはあくまでも噂話に過ぎん。

それにあの雪山に行って生きて帰ってきた村人は誰一人としていないじゃよ。

村長として死人が出るとわかっているところに村人を送り込むことはできない。

許してくれルア」

ルアの表情はどうしようもない苛立ちと涙でさらに歪んでいた。

握るこぶしの中からは血液が流れ出しており、

その胸中に渦巻く感情は声に出さずとも村長には痛いほど伝わっていた。

そして村長の目にルアの目が映った瞬間ルアはそのまま後ろを向きテントを出て走り出していった。

ルアたちは早くに両親を亡くし、厳しい生活を強いられる中姉妹仲良く暮らしてきた。
ルアにはユキノの笑顔があったからこそどんなに辛い日々でも切り抜けられることができたのであり、ユキノもルアがいたからこそ安心して笑顔でいられたのだ。
そんなたった一人の肉親を見殺しにすることなどルアにできるわけがない。
自分だけ生きていれば良いなどという感情はもはやルアの中には存在すらしていなかった。
ルアが自分のテントに戻り必要なものをポーチにまとめると、ただでさえ何もないテントにより一層淋しさが増した。
しかし淋しさに浸るような時間はなかった。
テントを出たあと何かに取り憑かれたように一心不乱に素手で周囲の土を勢よく掘り始め、数十分後テントを取り囲むように小さなお堀が出来上がっていた。
ルアは爪が剥がれボロボロになった自分の手を見て（そういえば土を掘る道具さえ私は持っていなかったな）と自分たちの貧しい暮らしを一瞬だけ懐かしんだ。
そしてテント内を最後にもう一度だけ確認し手に持っていたランプをそこに向かって投げつけた。
ランプの火はテント内の布に燃え移り、猛火となってテント自体をも飲みこんでいった。
しかしルアの心にとって既にそれはどうでもいいことであり、
一度も振り向くことなく全速力で再び村長のテントに向かったのだった。

「村長！私今から雪山に行ってきます」
「な！何むちゃくちゃなことを言っているんじゃ！他になにか方法がないか一緒に・・・」
慌てる村長の言葉にかぶせるようにルアは答えた。
「今自分のテントを燃やしてきたの。あれだけのテントの布が燃えるのであれば1日くらいはユキノをあたためることが出来るわ。その間に私はなんとか『百色たんぼぼ』を採取してくる」
その口調の穏やかさは晴天下行われる村人同志のあいさつとなんら変わらない当然のことを言っているようであった。
「何！」
村長は先ほどよりもさらに狼狽した様子で声をあげた。
「私たちのテントは村のはずれにあるし、ちゃんと周りの土は掘っておいたので、他の人のテントにはまず広がらないから安心して！」
空中で掘る動作を見せるルアの流血した指がその笑顔とは対照的で村長の顔を一層曇らせた。
「そんなことはどうでもよい！お主にもしものことがあったらユキノは・・・」
「それ以上は言わないで、必ず『百色たんぼぼ』を手に入れて戻ってきます。
ただ私が万一戻らなかった時はどうかユキノをよろしくお願いします」
笑顔の中に漂う悲壮感是谁が見ても明らかであったが、村長にはルアを止める言葉がどうしても見当たらなかった。
「・・・わしがどう説得してもお主の意思は揺るがないじゃろうな、山の麓までは村の男に馬車で送らせる。そして一つだけ約束してほしい。必ず無事に村まで帰ってきてくれ。」
「ありがとうございます」
ルアの頬を涙が伝った。

2

「それじゃあここに馬を置いておくから、絶対に無事で戻ってくるんだぞ！！」

「ええ、ありがとうございます！ユキノをよろしく願います」

馬車から下りたルアはまず余りの寒さに息を飲んだ。

生まれてからこれまであの暖かい村から一度も外に出たことがなく

外部の情報はたまにやってくる行商人から得ることしか方法がなかったことで

寒いということ自体あまりわからなかったからだ。

しかし同時に肌を突き刺すような寒さの中ルアは思った。

妹はこれ以上の「寒さ」に襲われているのだ。私がここで立ち止まることは許されないと。

村を出たのが5時間前。

帰る時間を考えると残された時間は少ないだろう。

ルアは歯をくいしばり雪山に登り始めた。

「あの雪山は大変危険な場所である。」

「雪山に行った村人で帰ってきたものは誰もいない。」

それらの情報がルアの頭の中には常に存在し、ただ「寒い」だけでは終わらないだろうと確信に近い予感さえ抱いていた。

そのため大きな瞳をさらに広げてキョロキョロと周りを警戒しながら歩いていた。

すると今まで見たこともないような植物や鉱石が目に残ったのだった。

もともとそういった珍しい植物や鉱石に目がなく、ときどき村にやってくる行商人に売り物の鉱石を見せてもらったり

、
めずらしい植物の話の聞いたりするのがルアにとっては至福の時であった。

『百色たんぽぽ』の情報もそういったやりとりの中で手にいれたに違いない。

将来は鉱石や植物を中心に探索をするハンターになりたいと決めていた。

しかしその夢がユキノのいない世界で叶ってもルアにとっては何の価値も持たない。

普段ならこの極寒の中だろうと心躍らせる状況なのだが、今のルアには『百色たんぽぽ』以外に魅了されている時間は皆無だった。

『百色たんぽぽ』はその名の通り百の色を持つたんぽぽ。

見ればその輝きに誰もが心奪われ、煎じて飲めばどんな病でも治してしまうという。

先ほどから植物や鉱物の他にも

ルアが見たこともない生物たちが彼女の横を通り過ぎて行った。

その体で突き飛ばされればルアなど容易く吹き飛んでしまうであろう大きな獣でさえもルアの方など見向きもせず素通りしていく。

雪山に足を踏み入れた当初は小鳥が羽ばたく音にさえ驚いていたルアだったが、獣達が一向に自分を襲う気配のないことに僅かずつではあるが平静を取り戻していた。そしてしだいにある考えが頭の中で形になっていた。

『百色たんぽぽ』はその美しさで人を虜にする。

それならば同じ生物である獣はどうなのだろう？

たんぽぽの虜になった獣は心模様が穏やかになり人を襲うことをしなくなるのではないのか、と。

ルアは何度も驚きながら『百色たんぽぽ』が存在している可能性を垣間見た気がした。

しかし、この自説が真実と大きく違っていることにルアはまだ気づかない。

なんとか頂上に辿り着いた時にはルアの手足の感覚はなくなっていた。

いつ千切れても不思議でないほどに凍りついてしまっていたのだ

手袋もしていない、長靴も履いていない、薄布を2~3枚重ねて体に巻き付けただけの装備では当たり前の結果である。

防寒用にと村長が体のいたるところに貼りつけてくれたツタの葉などなんの意味もない。

まさに「寒さ」を知らない村ならではの甘い予測がルアを難局に陥らせていた。

それでもなんとか意識を保ちながら前に進むことができたのは
出発前に持ってきたユキノとの思い出の首飾りがあったからだ。
ルアが12歳になった時の誕生日、初めてユキノが姉にプレゼントしたものだ。
5センチほどの平らな円形の木の断面にユキノが描いたルアの似顔絵があり
似顔絵の下には小さな文字で「お姉ちゃんいつもありがと」と書いてあった。
その平らな木から小さな金属性の輪がつらなって首飾りになっているという簡単なものだったがルアはそれをもたらしたまらなく嬉しかった。
幾ら流れるのか分からないほどに涙を流して喜んだ。

ルアの誕生日の数カ月前からユキノは食事の代わりに少しのゼニーをねだるようになっていたのだ。
「ゼニーを貯めて何がほしいの？」
とルアが聞いてもユキノは決して答えなかった。
普段はあんなに笑顔が絶えないユキノであったが食事の時だけは
「こんなには食べられない、その代わりゼニーがほしい」
と言い続けたのでルアはとても心配していた。
そのゼニーをためて工房にあの首飾りの作成を依頼したのだろう
そう思うと嬉しくて涙を止めることはできなかった。

ユキノが食事を抜こうとしてまで贈った誕生日プレゼントがルアを突き動かす。
「ユキノ、今お姉ちゃんが助けてあげるからね、待っててね」
ルアは首飾りを見ながらひとり呟いた。

その次の瞬間、何かがルアの数十メートル前方に轟音とともに飛来した。
辺りの雪はまるで上下逆さに降っていくように舞い上がり、視界は一瞬にして白一色で遮られた。
同時に山全体の崩壊を感じさせるほど強い震動が足元で発生してルアは立っているのも困難な状態に陥った。
「な・・・なに？いったい何が起こったの・・・??」
首飾りをぎゅっと握りしめながらルアは呟いた。
直後、とてつもない咆哮が周囲の空気を劈き衝撃波となってルアに襲いかかる。
ルアは咄嗟に両手で耳を塞いだがあまりの衝撃に体が硬直して動けなくなった。
しかしこの危機的現状を把握しようと、どうにかして開けた片目で舞いあがる雪の中を凝視した。
「あっ・・・ああ・・・」
ルアの口から声にならない声が漏れた。
下腹部辺りで場違いに温かいものを感じたが恥ずかしいという感情はなかった。
頭の中は恐怖で満たされていたのだった。

自分が掌にすっぽりと入ってしまいそうなほど巨大な獣が前方に存在している。
その獣・・・モンスターは蜥蜴のような形態をしており、体色は土色。
口の中には鋭い牙が無数に生え、その牙にかかれば人体など米粒ほどの食感さえ感じないだろう。
手から生えた爪は大きく尖っていて、見ているだけで突き刺された気分させられた。
「に・・・逃げなきゃ・・・早く逃げなきゃ・・・」
ようやく硬直が解けてきた体を反転させてモンスターとは逆の方角に向けると
死に物狂いで駆けだした。
山道の途中で見かけた獣達は私を襲わなかったのではなく、このモンスターから少しでも離れようとして襲う余裕すら
なかったのだとその時始めて気づいたのだった。

モンスターは逃げるルアの背中を視界に入れると鋭い爪で大地を掴みながら勢いよく走り始めた。一瞬にして最高速に達したその巨体は数秒でルアの体を捉え紙屑のように吹き飛ばした。おそらく何かに当たったという感触すらなかったであろう。

ルアの体には四肢を引き千切られるかのような凄まじい衝撃が走り、骨も内蔵も全てが無事ではないだろうと感じていた。しかし首飾りだけはしっかりと両手で掴んでいた。そのまま空中で意識は途切れ雪山の下部へ落下していったのだった。

3

う・・・ここは・・・

ルアは全身の臓器を破壊されており、声を発することができなかった。

自分の生死さえよくわからない深いまどろみの中にいるような感じがしていた。

しかしルアはすぐさま起き上がろうとした。

これほどの深手を負いながらもいまだ『百色たんぽぽ』を諦めていない...

どんな状態になろうとも自分が『百色たんぽぽ』を諦めたらユキノは助からないことがわかっているからだ。

そんな思いとは逆に体はほとんど動かさず、手足も完全に使い物にならなくなっていた。

なんとか失わずにすんだ視力が徐々に回復し周りが見えてくる。

洞窟の中、膨大な数のポポに囲まれていた。

ルアの頭の中に何者かの声が響く

「私はポポ神、お前は何しにここへ来た？」

ルアは頭の中で答える。

「私は『百色たんぽぽ』を探しに来た、妹が病に伏せているのでそれを治したい」

「そんなものはこの山にはない」

ルアが心の奥底でわずかに感じていたこと、しかしなるべく考えないようにしていたことをポポ神に言葉にされルアは頭の中で悲痛の叫び声をあげた。

「嘘よ！嘘よ！嘘よ！そんな言葉信じない！絶対に信じない！」

ポポ神は何も答えない。

「だったら・・・だったらユキノをどうやって助けてあげればいいのか？教えてよ！あなた神様なんですよ！」

「人の病のことは私には理解できないが、お前は理解しているはずだ。」

先程から頭でひとつの考えが渦巻いている。

即時の治療が不可能であるのならば、徐々に治療するしかないとな」

少し考えてルアは尋ねた。

「・・・温め・・・続けるってこと??・・・いったいどうやって？」

「この洞窟には不思議な力があり、お前の破壊された臓器は再生しつつある」

「答えになってない！」

ポポ神の意味不明な返答にルアは苛立っていた。

「私たちポポはこの極寒の雪山で生き抜くため、発熱性が高くその熱を逃がすことのない上質な毛皮を身につけている。その毛皮で外套をつくれれば人間の体も温め続けることができるだろう。そして治ったら捨てればよいだけだ。今のお前ならそのポーチに入っているナイフで簡単に私たちを殺せるだろう」

ポポ神の話聞きルアは頭の中で絶句した。

「妹をとるか私たちをとるかかの二択だ。おまえにとってこんな簡単な問いはないはずだ」

ルアは静かに口を開いた。

「・・・私にとって・・・妹が掛替えのない存在なのは確かです。」

でもだからと言って自分の身を守る以外のことで他の生物の命を奪うような真似はどうしてもできない」

「妹は死ぬぞ？」

「・・・それでも・・・できない・・・」

ルアは悲傷しながらも力強く答えた。

「おまえが山中を歩いている時、たくさんのポポがおまえの横を通っていた。通常のハンターであれば、腹が減ればポポの肉を食らい、私欲を満たすためだけにポポの毛皮を剥ぎ取っていく。しかしおまえは一匹たりとも討伐をしていなかった。その温かさに驚嘆しおまえの命を助けた。そのことが間違っていなくて安心した。」

「ありがとう。ただせっかく助けてもらった命だけど・・・妹を、ユキノを助けることができなければ生きてる意味なんかないよ・・・」

ルアの表情に影が落ちていった。

一瞬の間がありポポ神はルアにあることを伝えた。

「おまえの覚悟が本物であるのならば、
妹を助けたいと心から願うのであれば・・・ことはできる」

わずかな時間沈黙が流れ、ルアはある考えに達した。

「本当に、本当にできるのね？」

「ああ、私はポポ神」

ポポ神の自信に満ちた声がルアの頭の中に響き渡った。

「お願いします」

ルアの迷いない声が洞窟に響き渡った。

4

ルアは走り続けた。妹の命が助かるかもしれない。そのことがとてつもなく嬉しかった。

『百色たんぽぽ』は手に入れることができなかつたけど妹の病が徐々にでも治っていけば満足だった。

妹のことを考えるだけで疲れは吹き飛んだ。風よりも早く走れるような気がした。

さきほどの大ケガが嘘のように体は軽かった。

ルアは思った。

ユキノが元気に成長してくれたらいいなど。

そして今の自分と同じ歳になった時、

少しでも自分のことを思い出してくれたらいいなど。

村長の話声がかすかに聞こえる。

「どれ？おやまあ！これは大きなポポじゃ。これだけの毛皮があればユキノを温めることができるコートが作れそうじゃ、良かった良かった、本当に良かった」

その息絶えたポポの牙には木の首飾りがぶら下がっていた。